



Title	戦後沖縄：奄美－日本の解放運動／思想－潜在－偏在する沖縄戦後史の時代経験
Author(s)	森, 宣雄
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/44770">https://hdl.handle.net/11094/44770</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	もり 森	よし 宣	お 雄
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)		
学 位 記 番 号	第 18077 号		
学 位 授 与 年 月 日	平成 15 年 9 月 25 日		
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科日本学専攻		
学 位 論 文 名	戦後沖縄－奄美－日本の解放運動/思想－潜在－偏在する沖縄戦後史の 時代経験－		
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 富山 一郎  (副査) 教 授 杉原 達 教 授 川村 邦光 立命館大学文学部助教授 崎山 政毅		

### 論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、沖縄戦の終結直後から始まる沖縄－奄美における米軍統治から、1953 年の奄美の復帰を経て、1972 年の沖縄の復帰に至る 27 年間を沖縄戦後史ととらえ、当該期において奄美共産党、沖縄人民党、沖縄青年同盟、沖縄闘争学生委員会などにより展開された社会運動の歴史的意義を、思想と運動の両面から考察したものである。その基底に流れる問題意識は、1951 年のサンフランシスコ講和会議において確認された「潜在主権」を沖縄における主権の剥奪形態ととらえ、日米両国において主権が否定された占領状態とそれへの抵抗として沖縄戦後史を構想しようとする点にある。またかかる問題意識には、主権の日本への「復帰」の後も、依然として日本の米軍基地が沖縄に集中し続けているという現状への批判的視座が、含意されている。こうした点は、沖縄戦史を「潜在主権」の顕在化としてとらえてきた従来の認識を根底的に批判するものであり、本論文の「序章」ならびに「付論」において説得的に展開されている。全体の構成は、復帰運動が形成される時期における奄美共産党と沖縄人民党の果たした意義を考察した第 1 章、第 2 章、第 3 章と、島ぐるみ闘争をはさんで生成する新たな展開を取り上げた第 4 章、終章に分かれる。また前半部は、奄美・沖縄統一戦線を構築した奄美共産党の林義巳に、後半部は中部地区反戦青年委員会を生み出した沖縄闘争学生委員会の松島朝義に議論が収斂していく。以下、順を追って説明する。

第 1 章「『独自の共産党』奄美共産党の成立と解体」ならびに第 2 章「沖縄人民党の沖縄解放への道」においては、沖縄に対する日本共産党の方針が、徳田球一を中心に主張された沖縄の分離独立と人民共和国としての再統合という方針から分離独立を経過しない統合へと変化していったプロセスを綿密に追いながら、こうした復帰運動の形成を牽引したのが、沖縄、奄美における具体的な社会運動であることを浮かび上がらせた。またかかる展開において、奄美共産党と沖縄人民党、ならびにその下において構築された非合法共産党が果たした歴史的意義を考察した。こうした考察を受けて第 3 章「越境の前衛、林義巳と『復帰運動の歴史』」では、1950 年代前半、復帰運動が保守の領土意識にもとづいたナショナリズムと混合していくなかで、その内部に存在した社会変革運動としての側面をもっとも如実に体現した奄美・沖縄統一戦線とその構築に大きな役割を果たした奄美共産党の林義巳をとりあげている。そこでは、当該期の米軍基地建設にともなう奄美、八重山、離島から沖縄本島への人の移動とそのプロレタリア化にこの統一戦線が密接に連動していることが考察されている。第 4 章「日本復帰をこえる沖縄解放の運動/思想」では島ぐるみ

闘争以降の復帰運動、とりわけ復帰が政治日程に登場しその内実が軍事基地の存続であることが明確化される時期に独自の運動を展開した、沖縄青年同盟ならびに沖縄学生闘争委員会をとりあげている。また同章では、多国籍企業の沖縄進出に対する反対運動と軍労働者の労働運動を担った中部地区反戦青年委員会に焦点が当てられ、嘉手納基地に隣接するコザ市を中心に存在した諸党派、市民運動、ブラック・パンサーなどの様々な潮流をつつみこんだ運動体として同委員会を描き出している。こうした考察を受けて終章では、中部地区反戦を中心的に担った松島朝義の思想と行動に注目し、とりわけ松島が主張した「沖縄人プロレタリアート」という思想の重要性を明らかにしている。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、沖縄戦後史研究において以下のような意義を持つ。第一に、本論文は膨大な一次史料の発掘と聞き取り調査により沖縄と奄美の社会運動における繋がりやコザ市を中心とする反戦運動、住民運動を描き出した。これらの潮流は、復帰運動として評価されるものでもなければいわゆる反復帰論の中に位置づけられるものでもない。本論文は、復帰と反復帰において了解されてきた戦後沖縄史に内在した、地域、国境を越えた社会運動とそれに対応する解放思想を具体的に提示することにより、戦後史像の批判的再検討をおこなったものである。第二に、本論文では主権が剥奪されている沖縄固有の政治状況を注視することにより、こうした固有性を党派的組織統合において平準化しようとする運動論を厳しく批判している。またそれは、固有の政治状況における運動の可能性や思想の存在形態において、組織ではなく個人がクローズアップされることとも対応する。こうした分析枠組みは、世界的連関を持ちながらも固有の状況に向かい合った解放運動を検討するうえで極めて重要であり、世界規模での解放運動の中で戦後沖縄史を理解する基本的な枠組みを、本論文は提示しているといえる。第三に特筆すべきは、本論文が運動の当事者との密度の高い対話の中で生み出されているという点である。現代史研究は現在進行形の事態にかかわらざるを得ないのであり、過去の出来事への客観的な分析が求められつつも、現状への真摯な態度もまた必要とされる。本論文はこうした現代史記述のあるべき一つの方法を提示している。残された課題として、当該期の世界的規模での解放運動の中で戦後沖縄史を再度検討する作業が残されている。またこの作業は、終章で考察されている「沖縄人プロレタリアート」という思想を、より具体的な運動の場面で検討することとも直結する。だがこうした残された課題は、もとより本論文の意義を損なうものではない。よって本委員会は、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものであると認定する。